

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題

「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」

2020 年度第 3 回研究会（非公開）

日時・場所 2021 年 3 月 20 日（土）13:00–16:00 Zoom によるウェブ会議

プログラム

13：00–13：30 渡部 良子（AA 研共同研究員、東京大学）

「共同研究成果刊行計画についての報告」

13：30–14：30 高木 小苗（AA 研共同研究員、早稲田大学）

「14 世紀のバルール村再考」

14：30–15：30 矢島 洋一（AA 研共同研究員、奈良女子大学）

「ジュナイドのトラブゾン・グルジスターン侵入」

15：30–16：00 総合討論

今研究会（2020 年度第 3 回、通算第 9 回目）は、3 年間の本共同研究課題の最後の研究会であった。本課題は、イスラーム圏の歴史において、宗教的のみならず政治・社会・文化的な影響力・役割を帯びてきた聖者廟の活動を支える財政基盤に注目し、聖者廟が社会や政治権力との交渉の中、どのように財の獲得・管理を行ってきたのか、聖者廟の財産管理をめぐり伝世されてきた史料群はいかなる政治・社会・法・経済の情報をもたらすのかを解明することを目指した。その事例として取り組んだのが、イラン北西部アルダビール州州都アルダビールのシャイフ・サフイーユッディーン・アルダビーリー（d. 1334）の墓廟が伝世する 14 世紀～19 世紀の財産管理史料群の再検討である。シャイフ・サフイー廟は、イスラーム少数派シーア派の大国として現代世界に大きな存在感を持つイランの社会・文化の基盤を作ったとされるサファヴィー朝（1501-1736）の起源であるスーフイー教団サファヴィー教団の名祖廟としてイラン史上重要な位置づけを持ち、廟が所有したワクフ（イスラーム法に基づく寄進）による莫大な不動産に関わる文書・帳簿・目録などの史料群は聖者廟財産管理システムの長期にわたる発展・変遷の追跡を可能にする稀有の史料として知られるが、その多くは現在未公開の状態にある。そこで本課題は、将来的に本格的な開始・発展が期待されるシャイフ・サフイー廟財産管理史料群の研究に貢献する基礎研究として、公開史料の 1 つで

ある廟不動産目録 (ṣarīḥ al-milk) 写本を取り上げ、中世から近代までのイラン史・中央アジア史、スーフイズム、文書学の研究者が共同して不動産目録を読み直し、その情報を抽出・精査する作業を行なった。それとともに、不動産目録が映すサフイー廟の財産集積・管理とその変化の歴史的・社会文化的背景について、共同研究員各自の専門に基づく研究を試みた。その結果、従来解明されてこなかったサファヴィー朝下のサフイー廟ワクフ管理制度や、同朝滅亡後のサフイー廟の財産管理の変容、アルダビールの聖都としての都市機能、さらにはサファヴィー教団史、サファヴィー朝史に新たな光を投げかける数々の研究成果を得ることができた。その成果は2018年度、2019年度の2回にわたり開催した公開研究会で発表されたが、本年度共同研究終了にあたり、それらの発表を研究論集としてまとめる企画が承認された。

そこで、共同研究課題最後となる本研究会では、来年度に予定する論集刊行に向けての詳細な打ち合わせを行った。代表の渡部が論集の編集計画を説明し、また共同研究員から高木、矢島の2名が、それぞれの寄稿論文の構想発表を行った。高木の「14世紀のバルール村再考」は、本共同研究で扱ったサフイー廟不動産目録の中でも最初期のワクフ物件に含まれる1村落の来歴に関わる文書史料を精査し、聖者廟の財産管理の中で伝世された様々な史料の研究可能性と課題を示すものであった。一方、矢島の「ジュナイドのトラブゾン・グルジスタン侵入」は、サフイー廟を拠点として発展したサファヴィー教団が指導権争いの中で軍事力を獲得し、王朝へと変貌していく転機となった第5代教主ジュナイド期の軍事行動を、新出史料を中心に再構成・再検討するもので、サファヴィー朝前史としてのサファヴィー教団史に新たな分析を開拓した。

これらの研究発表を踏まえ、今後の研究論集刊行にいたる具体的な作業計画が話し合われた。

本共同研究課題は、今後、上記の成果刊行作業を進めるとともに、2021年度から再び3年間の新課題を開始する。そこでは本課題で行った不動産目録の研究から、サフイー廟財産管理史料群の将来的な研究基盤となるデータ集を編集するとともに、サフイー廟をはじめとする西アジア・イラン社会の聖者廟の財産管理の諸相を、中央アジア・南アジアほか多様な地域の聖者廟の存立基盤との比較研究へと発展させていく予定である。AA研共同利用・共同研究課題による本共同研究へのこれまでの、またこれからの支援・助力に、深く感謝したい。(文責：渡部 良子)

高木 小苗「14世紀のバルール村再考」

発表者は、本研究課題で、サフイー廟不動産目録に登録されたアルダビール地方のバルール村の土地と税収が、14世紀中頃までに、サフイー家の所有財(ミルク)・サファヴィー教

団寄進財（ワクフ財）となる経緯の解明を試みてきた。本研究の目的は、(1) サフィー父子が、当時の政治的有力者との人的関係や不動産収入の獲得をとおして教団の基盤を確立していく様子、(2) 同時代史料が豊富ではないモンゴル政権イルハン朝末期の君主アブー・サイードの治世（1316-35）から彼の死後の政治的混乱期におけるイラン北西部の政治・社会状況の一端を明らかにすることにある。使用した主要史料は、サフィー廟不動産目録、廟に保管されていた行政命令文書である。今回の発表では、3年間の成果として村の変遷を整理したほか、不動産目録中の村の記述の解釈を改良した。また目録に登場する人物の特定を試みたが、他史料の記述との矛盾が判明した。総括すると、①村は、サフィーの私有財で、彼の息子・後継者のサドルッディーンに相続された。②イルハン朝は、村の税収を重臣チョバンに食費として割り当てていたが、彼の失脚前後に、教団に割り当てた。その後、村の税収は、サフィーにより教団の寄進財に設定され、彼の死後、息子アブー・サイードが再設定した。今回の発表では、不動産目録編纂時、当該村に対するサフィー廟の占有権が生きていたか否か、それが不動産目録の記述を解釈する上で重要であるという意見とサフィーの息子が村を寄進財として再設定した理由を問われた（補足：後者についてはサフィーによる寄進文書の紛失が影響した可能性がある）。（高木 小苗）

矢島 洋一「ジュナイドのトラブゾン・グルジスターン侵入」

サファヴィー教団史上その重要性の割に不明な点が多かったジュナイド時代は、新発見のペルシア語史料『ハヤーティー史』によってより詳しく知ることができるようになった。本報告は、おじとの確執によりアルダビールを追われていたジュナイドのトラブゾンとグルジスターンへの侵入について、同書の記述と関連史料から検討する。

ジュナイドのトラブゾン侵入については既知のサファヴィー朝史料やビザンツ史料からも知られていたが、『ハヤーティー史』の記述はそれが姻戚関係を結んでいたアクコユンル朝ウズン・ハサンの軍事活動と密接に結びついていたことを示している。一方ジュナイドの「クルクラのグルジスターン」（サムツへ）への侵入については他に記録がないが、周辺の諸言語による記録と突き合わせることで、やはりテュルクメン勢力による度重なるコーカサス侵入の中に位置付けるべき出来事だったことが窺える。ジュナイドはウズン・ハサンの勢力に便乗して各地を荒らし回りながら戦闘の経験を積んでいき、その事が後にサファヴィー教団の軍事化に寄与したと思われる。また、政治的変動期にあった15世紀半ばの北西イラン・アナトリア・コーカサスに出没したジュナイドの行動は、各地の政治状況にも影響を与えていた可能性がある。（矢島 洋一）